

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

A Diachronic Study of Passives in English
(英語における受動文に関する通時的的研究)

氏 名

本多 尚子

論 文 内 容 の 要 旨

一般に、個別言語においては、ほぼ全ての言語に普遍的に見られる核となる構文（以下、コア構文）と一部の言語でしか見られない周辺的な構文（以下、周辺の構文）が存在することが知られている。その周辺の構文の例として、周辺の受動文があげられ、英語の *get* 受動文、受益者受動文、擬似受動文、間接受動文等がこれにあたる。そして、これらの構文の通時的発達については、前者 3 つについては先行研究でもある程度の言及はなされているものの、共通理解を得るまでには至っていない他、間接受動文についてはこれまでほとんど言及されてこなかった。

本論文では、英語史における受動文、特に周辺の受動文の発達について考察し、生成文法の枠組みを用いてそれに対する理論的な説明を与える。また、コア受動文と周辺の受動文の対応の問題も扱い、英語の受動文全体のシステムの構築及びそのシステムと各構文の通時的発達との関わりについて論じる。

2 章では、歴史コーパスを用いた詳細な調査結果を踏まえ、*get* 受動文の起源及び発達を明示化する。ここでは、*get* 受動文の起源は「起動の *get*+ 叙述形容詞」であり、その発達は、語彙動詞から軽動詞への *get* の文法化の観点で説明されると主張する。特に、*get* の文法化は、Gelderen (2004) によって提案された Late Merge の原理に従うものである。本分析を用いることにより、*get* 受動文が持つ特殊な性質のほとんどを説明することが可能になる。また、本分析は、生成文法が統語的変化のみならず通時的変化を説明する際にも役立つという新たな証拠も与えている。

3 章は、受益者受動文の通時的発達に焦点を当て、その出現及び発達について、Pylkkänen (2008) によって提案される 2 種類の Applicative P を用いた統語分析を提案する。本分析を採用することにより、受益者受動文の発達のより正確な道筋を明示化することが可能になる他、受益者受動文と関連する他の構文である二重目的語構文や直接受動文の発達さえも適切に扱えることを示す。また、本論文は共時的及び通時

的に観察される *I gave the ball Mary.* のような文の容認性と *The ball was given Mary.* のような文の容認性が一致するという事実を理論的に説明できる可能性を示唆する。

4 章は、英語史における擬似受動文の出現及び発達を明示化し、統語的再分析や意味的制限等を用いて、統語的・意味的分析を与える。本分析は、擬似受動文の発達により正確な道筋を明示化することを可能にし、擬似受動文に含まれる多くの動詞が非対格動詞ではなく、非能格動詞であるという言語事実に対する理論的支持を与える可能性を示唆する。

5 章は、Emonds (2003) によって名づけられ、共時的にも通時的にもほとんど扱われてこなかった間接受動文に焦点を当て、脱文法化を用いたその発達に関する統語的分析を提案する。本分析を採用することにより、間接受動文が持ついくつかの特殊な性質を説明することが可能になる。また、歴史コーパスを使った精緻な調査を通じ、この構文に対するさらなる研究に対し、しっかりとした経験的基盤を与える。

6 章は、英語受動文に関する統一されたシステムの下で、本論文中で扱われた周縁的受動文を相対化することを試みている。そのための第一歩として、コア受動文 (*be* 受動文) と本論文中で議論された周縁的受動文との間における英語受動文に関するシステムの構築を試みる。さらに、このシステムがどのように周縁的受動文の発達と関連付けられるかについても議論する。

最後に、7 章は本論文の結論であり、先行する章における自らの主張をまとめている。